

一周回って同じところ？

常務執行役員 小畠 秀樹

今、いろいろなことが見直されている。

<インフレ>

バブル崩壊後インフレというものがおおよそ存在せず、日本人にそれを思い出させるべく黒田日銀は奮戦してきた。今、日本国民はインフレを日々感じている。実際、エンゲル係数は上昇中だから庶民の関心も高く、食品値上げをニュースがわざわざ報じる。こういうことは「起る」(自動詞)。開放経済だから海外発の要因の影響を受けることは避けられない。ただ、インフレを都合よく起させる(他動詞)かどうかは別問題。マクロの理論が説くように、生産性改善なき賃金上昇は国の競争力を低下させ、結局賃金を元に戻すか、さもなくば不況へと進む。残念ながらそのとおりになりそうな雰囲気である。自ら競争力を高めずに官(日銀)に頼ってばかりだから、こうなるのは当たり前なのかも。

<資源は有限である>

生産性の改善のなかには、未利用資源を対価を支払わずに活用したことで達成してきたものもあった(極端な例は「搾取」と呼ばれる)。ただ、今は、例えば環境保全の観点から、こうした資源の利用には対価を支払うべきことの理解が進んでいる。これが駄目ならあっち、と食い散らかすモデルは今度こそ行き詰った。単純化のため、資源制約を経済モデルに持ち込まないことが多かつたが、もはや単純化できなくなつた。SDGsが注目を集めたことの最大の功績は、この点への認識が改まったことだと思う。

<戦争>

世の中には何かと戦争したい人がいる。これまでこのことをお伝えするに「2000年公開の映画「Thirteen Days」を御覧あれ」と言ってきたのだが、今年2月以降は、化粧のような人が毎日テレビに映っているのでその必要もなくなった。最近では大陸のこちら側でも、ミサイルを日本海にむけて連日発射する人がいる。日本は憲法で戦争を放棄し、紛争は外交で解決すると誓っている。政府の当該部局の方は最後の瞬間までその精神で頑張ってもらいたい。ただ、偶発的、局所的なもの含め、起こってしまう可能性について認識するとともに、民間の我々も実際に備えなければならない。2022年11月2日の日本経済新聞が、台湾進出の企業の半数が有事の際の対応策を策定済みか策定中、と報じているのは世の中に常識が残っていることの証左と信じたい。

<ヒトは進化しない>

世の中が便利になるスピードが2000年代に入って加速したと感じた。このままいけばSFのように肉体を要しない世界が来るかも、などと夢想する人もいるだろう。一方で、精神面では人間は全く進化していないのではないかと感じる。例えば、筆者が学生時代にはいじめはフィジカルな問題だったが、視界から除去しても根絶したことにならないことは、サイバー空間へいわば地下化してその構図が今も生き残っていることからみても明らかだ。唯一の救いは、KYな意見を発表する場が残っていることだろうか。(「声が大きい」人にあらがえない空気が作り出されてしまったことへの

自浄作用なのかも)

＜円安は善で悪でもない＞

これまた当たり前シリーズなのだが、「円安=善」をアピールする政権が長く続いたために、多くの人が「日本に資源がないという超重要事実を忘れる」症候群を患うに至った。今や想定外の円安をみて、「円安は善」を説いた方たちもろうばいされておられる。政府には、資源の乏しい島のうえに暮らす1億人全員のことを考えて経済運営をお願いしたい。

弁証法の「正・反・合」のように、見直した結果新たな境地に至ればよいのだが、余りにも当たり前のことを身をもって知るだけ、というパターンが多いことにがく然とする。いわば「正・反・また正」になっているのではないか。ここ十数年の反教養主義的な流れをそろそろ変えていかなければならぬと痛感する。そうでないと「歴史は繰り返さない。ただし韻を踏む。」のだから、惨禍が繰り返されるのを受容しなければならなくなる。潮目よ言われ。